1278
30

村田

朝夷巡嶋記全傳第六編巻之五

東都　曲亭主人編輯

後輯第五十七

節義の守戸浦
損益の元鳥塚

光仲の愛物かろうず人々駭き且感じる。そが中ゆ義邦は且見姫の送せ歌を。
こう逸しそうも唫して後悔嗟嘆ゆ勝ざりけん光仲ゆうも對ひて辭のそゞめを
推もと紀ハ某が愁ゆ藁二郎を元田の莊へ遣しうりける故ありて紀よしかき
ますをつるゆ紀とのふを光仲ゆあぢ。いでくゝることゆうんゆ袋坂の窮阨ゆも。
交遊の義を忘れまゝで彼男をもて守直ゆが資とせられしあまりに親切
他人の及ぶ所ゆあらず慮ひ足らぬとて。そが妻ゆ頭髪を剪らせ刺
忠信節義の藁二郎校枝ゆを非命ゆ殺せし錯誤ハみゆ某が方寸に

惑ひより外なりといへども面見ぬ守直もさぞ恨みけん。あるふに高吉
等ぶ如く程も影護しとの家人食慰め難く齊一嘆息をなりける時
義秀勝を進めて藏人さの〻歎死ありぬ。四時を行ふ天地も寒暑不順の
差舛あり。聖賢も亦然り。誰か怨みの深へ死。そを改ふまもとて歌
婦人ハ胷の廣う〻長。寃屈の怨を身を措うて早〻く頭髻を
剪られ小かども尚祝髮ふ及ばい相計ふ術もあるうぜあいそこのの
某ふ。うち任しめへう。抑且見姫の一條ハ前日小壺の浦邊ゆく某
これを聞くれども告るよ暇あるし。ふ和殿の夢想ハいよ〻奇ゆしそ。
且精細あるゆをなるりるゆ聞くるハ菌様々々と浦太郎が支の趣
首より尾りまで言送もあく說示せば光仲義邦ゆ〻ハ高利
廣光高吉ふ城戸水草馬養の青年輩まで中べく兄弟夫婦

一對の彼誠心を感じる。次の間よさへ人ありてよとばりふ泣沈む若女の
声ぞ聞えける。當下義邦ハ廣光ふをえ〻りく彼蒙二郎ふ異父の兄
あるゆしハ小袋坂の危窮の折ふ中かどそ。その嫂と共侶ふ黄泉の客とかん
とつゆ〻ふひ〻ぐり死然ばとそ死しるめハ惜やど返るべくもあるぬを幸ひ中
かの兄ある。浦太郎と称ふ。朝夷ゆふ値偶せしハこも亦一奇支ゆ。
といへば廣光さシひ浦太郎ハその宵より御館ふをるゆ中かれば朝夷ぬふ
請まうさん。御對面あれ〻といふを義秀側より。そハいそまでもあ九件の
男を諸君子の見参ふ入まんとて。召のぼし置るとのひ〻ふ中ハ
し。浦太郎ハ那里ゆをる。近く進やと呼立れが緣頰の畫処ある。簀戸の
蔭より応る声隱らせし。浦太郎ハ光仲の夢物〻りを洩ぜしう胸塞
ぞ。たのもしく涙の雨の袖ふ漏ても〻ふ憂ゆハ漏れぬ葛如〻。

圍坐の席の末に數ならぬ身のなりあく列ぶは現一樹の蔭他生の縁と緣
類に進むも入らぬ額つけば義秀うつくしく浦太郎是首より彼首へ遷らるれば
諸君子のいはれしすも多田氏の靈夢のすもよくぞえらるるんあを藁三郎
故主多吉見殿ぞあの方さぬ桜枝が主多田殿ありとひとりくに告あるもれば
義邦やをら進みありて。やよ浦太郎狀を下めてあひぬ幾遍いそも返らぬすをいふ
無に似くれども死して灵ある藁三郎桜枝が忠義は今ぢに感ぢるよりあり
あり。それも歩らぬ汝が誠心貴賤その差ありといふとも親の心を忘び汲て弟が
家を嗣せんあるに逐電せしに呉の太伯の志に似りとのは半只この一ト條のみ
あるを婦翁の恣を復さん為に飽ぬ夫婦の別れをしつ。活業をぞ思へくぞ。
多年心を竭せと狀天感空しうねびて。朝夷ぬしに値遇せしり獲ぐ兄
両隻の鰐を刺さに。みな同日の美談かれ是をあひ彼を受べ藁三郎は

あふ心地ぞ。本意を恢ひ對面ありぬとのに高利廣光高吉みな進み出
名告をしつ又管參乙巳ざりに且くと浦太郎は額つ兄る頭を撫過世ぬり
てやこの年来ぬ愛顧を稟ぢりし藁三郎が兄ありとそ大人君子の恭く
ぬ目ぞあるのをぞいと懇に感めるふを幸ひとぬ申べき又幸ぞしとや
まうぶ。兄ぞの歓びに就て亦ぬ哀ぞ。まぬを藁三郎桜枝が身後の
忠義の彼首も浅ぬをえられぬいと愚なる心ぞ。ぢりくぢひへば大約貴兄と
戦ぢる夫婦の情義は下易に。始あり終あり。始あり終あるは良
善の君子といふとも德に闕る所ありを。弾かるとあるかのぬ妻の平柴太田の
殿ぬ。ぬ疑の解さをあへぬのをば姫ぬ人を召久さをあへぬ。ぢるに兄は主殺が
今生後世の雲霧く天津月日をうるるすあり只願ぬ兄はこのすをといふて
俟さーぬるる誠はいとをくあられし光仲これをうもぬく躬を務に勝進向

浦太郎なりこし入進めされけるを藏人光仲それと聞て名告をなべりしをのれハ
ざるましハ汝が為に嬀く差る哉ぞとなるに心の誠を演ていれし趣甚意に
稱へり光仲も亦木石ならねバ越に夫婦の再會を欲せざるにあらねどもその
身ハ光弼義あり且見ハ早やまで頭髻を剪ぬるぶとも輙く帰るべくもあらざれ
いへバ光仲が身の非を謗るに似たれども彼飯酢の下條ハ某に謀られたる。
守戸くれをよく知られども思ひて後方をえ之なきを義秀も甚くあはれ給く守戸を留る。
と喚立れバ先の程より紙門のあちらに泣沈みたる守戸の局ハ忍もあへず涙を拭きて
おそるく進み入るを義秀義邦辞を被て有れも間近く侍らせ給り登時守戸ハ
眼包に残る涙を袖に拭へども宴時頭を擡ぬをやう座くして光仲義秀
義邦等に對ひていやう曩ハ接技が縁しに連て武蔵より寄せあひぬる。
姫うへのおん消息をみそかに取継まゐらせしその為忽地寃となる情由ハ

先より殿ぞのおん物うけりに驚き給りぬるを諄言に似たれどもかの折武
藏の姫うへより贈らせ給ひし磁器に異ありとしも絶て得知らざりその詰旦お庭に
一隻の鳥の死したるをえいてあるじもはかなけりしを今ぞ太田の殿のおん物ならば
符合して毛骨も竦ぬり死なれハ殿のおん疑ひハ寔に然るべき事なりしをと
その愆ハ矩を踰掟を犯して姫うへのおん消息を取継まゐらせたるからへは
侍るうし。あまつさへ御灵夢のよし云云と姫うへに具に告させ給ひしかバ御髪を
剪らせ給ふとも躬く帰らせ給ふぞやいともいとく後方をえ入りて南浦太
とのまふまでしる接技が自殺まで對面ハせざりしかどもおん身の舎弟
藁二どのゝ忠魂義膽識りせばいかにして姫うへのおん濡衣を乾させまゐらせん
齢四十に及ぶまで子のあらざるハが女児ともいひし姪を先だてたる悲しさハ
質にのこりたおん身ハ舎弟に立代まゐらせて接技にかり代りて姫うへ

浦太夫婦再會のおん使ごもせばりせば草の原なる孤人ふ在うハかりとう云
うんおん身ハ何とぞぞと問れて勇む浦太郎ハ頭ふ際の進むを覚むをそ
其も顧ふりし君をそバ身をそ。この議いよく成就せば弟と妻ハ手伝の
讀経ふ優く佛果を祈ん為ハ郎君吉見の歳ぞ孫を添さ為人七
彼姫ふ人の帰ふ逢みん。おん相討とあるまほ〜ろ御慈悲々々と彼此へ額
つく姪夫妻の殊切なる願ひ深ち海の名ふ知守ふの浦ふ船渡りふ歎ち
人欲道理ふ逼られく感涙の外ふ中ふ義秀ハ勝ちを相ハ声高くふ
通微妙ち願ひ。これも亦件のをを笑ふ日ふ藏人夫婦の為ふ肝胆を
摧くをのこの議輙く整ひぐち情由ハ只今夏田生のいれ如ハ歎義ふ
且見姫ハをくより尼ふなるべち情願ふ駿河前司の許ぞ七藏人ふ
妻ぞさりと偽ぞ七をひ合ー七今その意中を推量ふ豪二郎ふ灵ふ

些の恥ありとも前司殿の恩義をふ去らるべち妻ふ妻ふ咒く那
時飯酢の絆の真偽を考糾ぞ怒りく歌を贈りハ短慮ふ
今更ふ後悔脾を嗤の外ふ然ろを僅ふ歓べハ曩ふ梭蔵二郎
忠告の灵魂ふ今ハ守戸と浦太郎が使を望む媒妁ふ
先仲ふ色ふ愛情ふ惹れく妻ふ逢んと楽ふまあ〜ふあふ
縁ふを結んとも又結ぶとも太田ハ且見が荘園ふ彼處ふ
あれぞを世をふ捨て往方もふを世をふ
あるまあ。小三郎もとの意を為く守戸浦太が案内をせよ伊豆へ遣を物ふ
あれとふ短刀ふ技く頭髪を帯と剪ふ
筆を技ぞ且見姫の袱の裏ふ
べち祥ぞありけると書れる件の歌ふ推並べく。後の世をかけくもをハ

黒髪の柔れのそゝとされやとゝまと書とめ讀へて両隻の頭髪を推
包む紙の端をもゝく結びて いざとて守戸浦太郎ひとりふもとに
よびれ あちそもゝふとゝろふ人衆駭嘆せざるもなく呆れく目と目を
指もの〻あと問べくもあるぶるせ義秀ひとり世も驚ぶ左右をつく
えゝろく諸君子何とうんあひ〻ふ夫婦の離別ふ世をそうゆく髪を
前る藏人かんや先あくこの意を猜しめへといられて驚く光仲ハふを招て七
推禁め朝夷めしの賢察いこの席の外漏もべゝふ某既ふ世ふ捨られても
憂命のあゝん限りハ横難を怕るのをかれが浮世ふ望をれあるを
示ハ薙髪の體ハ嫌忌を避ん為ふ〻科をれ且見を誕ゝ〻その怨をも
慰る報ひをあふ包ゝ曩ふ廷尉ふ義盛を預けあゝ〻弓箭を取よせ
ゆひとのふ義秀常鳴く童扈従を招よせ縛云云と分れがあゝ

ハ果く退出て且くしてもて来るゝ弓箭を光仲やゝ受とゝ戴く
左右ふつれ立下何邊小三郎近く進ゝて秉まあれハ兄家の重宝雷上動
透羽彫羽の弓箭ハ頼政卿より相秉して仲綱これを駿河守廣綱めしふ伝へ
めへを介るふ経任征伐の刑不肖の某借用て國賊を討夷げしも皆この弓
箭の徳ゝく霊応灼然るゝハ世の人もよく知まゝ光仲既ふ黙られく
道へとかゝ人とれるふ笛置くべれものふあゝ〻かれハ仲綱の御子孫ふ譲ゝと
ゝひつ召篭られゝその日より廷尉ふ預措ゝ仲綱のかゝ子許ふあり
嫡男肥後守宗綱めしハ治承四年の戦ひふ史道ゝく自殺ゝ次ハ二男
左衛門尉有綱めしハ治承四年六月十九日伊賀國名張ふく平時定ふ
殺れゝ三男田代冠者頼成ハ今ふ鎌倉ふ在りといへども采利の為ふ
恥とゝ〻傾城局の別當を奉ゝ人れが賴げあゝ〻四男廷尉成綱ハ

間中隼人
朝ひる
光仲
下河辺小三郎

既に久しく世を逝あひぬ。五男八廣綱朝臣ゆく實八仲綱の養嗣なり。
判官代頼季も近屬物故のよしあり。されどこの人八高吉も親てよりよく
知りつゝんぬ。ちなみに伊豆守公綱ゆく八宗綱のむすめゆく仲綱朝臣の嫡男なり。
弓箭を取て父祖に劣らぬ大内の守護として年来在京ものべ給へるこの弓
箭を公綱ぬしに譲らんとおもひ和殿伊豆に赴かく且見姫ゆくこれらのよしを
告ゝく華洛に走登り公綱ぬしに伺へよ。彼人のもとあの後の住ひを甚聞
問れがい。ゆひ入る深山の牡鹿皮とせんゆく弓箭を捨て身をそやすけもこと
ぞりなきにへと答へよりと叮嚀に示しゝく弓箭を遠ちまふべん高吉ハその
理りかれば推辞ゆく応ひてぞ畏るこれを又彼を思ひぞむ。義邦主従
高利に守戸浦太郎の傳ぞ刃に考ぐと水枯の杜かくなくに慰る言の
葉もあく深く夜の席上にぞ蕭介之光仲左右をえらへりて喃諸君子

かうしぞ愛惜の述懐を似られぞもむうゝ外に聞せて書の後部断の
一炊も忘へ今のうらうゝ人ゆり除目補任の目覚しぞも把安南村の一夢還ぞ
かくとばけふより道歸を挑中齋とのゝ。ぞ知のゝ。ゝとをうゝ。ぞやとうの笑へば
義秀も亦含咲ゝく光仲入道挑中齋こそ相応しぞ佳歸之。彼沈氏
既濟をしゝく世に在しぬ壁署を書ん枕とゝ。ぞ既にゝ。寂よとの鐘も
響くゝ浦太郎守戸に起ゝく退ぞく起行の准備をせぞ。といそうんぬ。
高吉も亦共侶にとゝく齊一立んとする程に次の間に人ありゝ。ぞ陳更
と呼禁めゝく猛に進ゝ入るゝめをとゝれば見別人あゝぞ間中集人守直
ゆりぞひうけあれるゝかれぞあゝくゝに。ぞとぞうりに衆皆驚ぞ且怪ゝぞ只
つゝくとうち目戍ゝぞ守直ゝとゝと含笑ゝく先義秀ぞ仕官を尋ゝ義邦
高利光仲ぞ蟄居免許のよしを祝ゝく又光仲に對ひていふゝ此度某當所に

まつるを縁とも知せまく思はさど訝しく思れん先何よりうまうにへ記いはる月の
阮難ふ援技蒙二郎ら灵魂の貧ふりて捕らはを被脱け紀とり姫う人ふ俱し
たそろ。いづ　ぜ　きり　うち　ひと　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ　ぬぎ
苦りく伊豆を志さ走る折ろう彼ふん頭髪を包せあひ祇物ハ苦六ぐ
奪略りくるを怒地虚空ふ吹升されく往方もあるぐ
ぶいきし　きりけうえう　ふこれやまあく怪しく剪せあひ姫う人の
大奇事ゆく吉凶料ひ知ろうしふこれやまあく怪しく剪せあひ姫う人の
御髪ハその夜次の夜と夜毎々ふ延るとと或ハ四五寸七八寸既やく変玉かる
藍玉院へ著ゆ白い御髪ふ弥倍く地を引ゆまぞふ
未曽有の珍変あれば某諜ぎりて祝髪得度のるよ及ばぞ舊の俗まく
をりませしふ一昨夕ゆうりあく援技蒙二郎ら尋来て灵田殿吉見佐味の殿
たろう明後日ハ赦免の慶びあるんとく鎌倉へ赴紀更遅々せ後悔あるべしと
報るとゆべ夢覚さり天明さ後ふこのるを姫う人ふ告まう芸姫う人ハ驚紀旦

欲びくるこいが昨宵見るる夢もてやこの夢と一点違ひを者を正為べるる
べ紀ふとく鎌倉へ赴紀く絆の虚実をあるせまと宣ふふ憑しく彼侍ら
女僧達ふ姫う人を委任つく獨濱邊ふ赴紀く便船を索る程ふ石損し船の
鎌倉へとて纜を釋くとゆえしゆべ便求めて港成ま下田の浦を泉出せしかけふ
暁のるりふ折うく順風ありければ三十餘里の海上を只一日ふ泉著さ旦巷
談を拐ぬくふ主君并ふ殿ぐらの恩免の沙汰夢想ふ違ふ朝夷大人の柳
営へ徴れのひるるくふまぐく定うふゆえしゆべ海月の胃ふあふ心地して勇ゆべ
ゆ進ふ隨ふこの御館へ推参せしゆべ黄昏時のるりて紀かて大殿義秀君殿
常盤をふ見参しく由を述しふ大慶の宣ふ義秀い夏田吉見佐味の人々と囲半七
如此くくの座敷ふをり今酒醼の最中ふんふとく彼処へ紀ねとて章意を
隷られうかくふの次の間まで来る程ふ諸大人の物ぐくひのを蕭ふふ

うべその言果て後ふりを見参ふへらもとそのふく業内の童を退けてひとり建屏の
蔭ふ坐を占てやうぞ時を移を程ふ昼寝ふ主君の霊夢のゆ併ふ守戸浦太郎
ふが素生も又その心振も勝腕かたぶ学そう又只柔ふのうへのそかそ主君の
後悔弓箭のうちもん警を剪めふ折ふ至てつめく鼓嘆禁めもうんとく
立おくせーふたんべくもあーぎれが淺れ胸を推居く猶も彼首ゆひふ歳の
頭髻を剪めひーふ別ふ賢慮のあるよーゆく只一ぢ嘆ふ姫うへふ贈らせあふ故
のこかゆを洩ぞーよりそで発そく安心今へからとそふきり朝夷大人の云云と
守戸浦太郎ふふおろぬさーて小三郎共侶ふ姫うへのおん為ふ愛玉へとそ起
行の准備を急ぎせのふもん姫うへの無為御髪のゆも今この折ふ告ふろ
さぞふ怠慢の罪免れぐさーと笑ば声をあり立く漫ふ呼禁めゆひゆき暴ふ
桜枝蒙二郎ふが自殺の折の為体めひるよーふ如此ささへ余後渠ふが見現

顕れ橋間苫六等を撃走らーふ病光景ふ箇様々々と具ふ報て又ひゆり
笑くが如況ふ浦太郎守戸も劣らぬ孝友節義多くねぐ況ゆの共只恥ゆくを
繹の初ふ某慮ひ足らぬーてもん消息の究とありーふ大くふ恐ゆりもうふ
あれども漸くふ厄釋け禍退けくかるる園坐の席未ふまり合せ上期の談ひ
喻るふ物も劣ぞ併朝夷ぬー御橋梓の餘光あるべー寔ふ愛ふーー愛
たーと尋況勇む主従の再會ふ現頼ーく耳新ある珍説家信ふ光仲頭を
傾けく感ーく只顧嘆賞せ況く席ふ在りと有る友人主従推併く誰の感
嘆せざるべ況。物ふ動せぬ義秀さへふ咲片向く恰悦ふ堪ずめの長ーより産ふ
易ーとふ鄙語ゆ似るるかふ。奇ーくと稱へりそが中ふ光仲ふ況くるふと顧ふ
加く肩より考況息を吻況忠臣烈女の霊あるよーふ和漢ふ先蹤多くれぞ
蒙二郎桜枝が霊魂捕ふを矢庭ふ撃退けて又夢ふ入り頭髪を届け且見

明の建文の〜と文繡王逆謀あり今うち〜王が髯延て三尺あまりこのゝ愛戚らんとすれば果してその髯の延しこと一夜にしゝく長サ三尺に及びしとぞこれらの事ハ天朝の建仁より二百余年後の事なれバ光仲があづかりしらぬ事なれども由なきまで恨ことを

姫の窮屈のよしを許さるゝを怪しみ其子姫が剪さる髻の三四宿の程ゆーしく舊の如くに延さるハ鬼神もよくしがたき所也現未曽有の奇特也唐山にハ元祐年壽星降りて道士となりぬ酒を喫を日に一石その頭の神さるてこ一宿に長三尺に及びしとぞ世に云ふ福禄壽星これなりといへどもそれ人倫の亂るゝ星の精のすなれバ且見が例に擬すべくもあらず。おのれに貞女の冤を憐む神明仏陀の冥助ある欤然らバ三位入道頼政卿己下父祖の神灵の祝髪を禁めさせ給ふなるらんかゝんとハ知らずして光仲ハ頭髻を剪させ嫌忌を避しも料なき妻を証さりける悪報といふべきなり損益得失定にあるまじく至らざる迹のゆゑなれど知るに足れりかくても剪らるゝ頭髻ハ且見姫よ亦して後藍玉院に相撲を長吉塚とも呼做さバ自他勸懲の端となさん是光仲が願ひと高吉ハ守戸浦太郎と舟行を伊豆へ赴かくこれよりのち且見に報よ守直ハ留りて翌ハ吾儕と共倍に

太田の莊へ立かへりて兵火に失たる家のすゝをのぞぐべし土木の功の終りなバ且見姫を迎入れてそれハ諸國を遊歴すべく廣綱朝臣の在処を索ん今更夫婦再會の縡云云と世に知られなば亦他人に忌るべしと示せを義秀うち聞てその議誡に肝要な灵夢のよし且見姫の黒髪の猛に延さる奇に誇りて口走らバ又も禍を招くは必しも秘なくとうを抗て諭せバ衆皆有理と応て斉一口を箝ぐける。かくて守直高吉ハ自他主従の恙なき。この再會を送に祝して別後の情を述る程に。その言果て義郎ハ後方に程へ退り武詮と昌之をみ名りて四郎太郎五二なる方へ進めといひて義秀うち對ひて朝夷ぬし某今置土産に足下に送る物あり。この武詮昌之ハ信夫莊司の舊臣なりければ譜第なるのみかハ足下も知りぬ若かるが如し。介なるに某稿にある寒郷の領主となりて家隷多く扶持せんとすれバ身にふさはしく相応しからずそれも亦彼らが為の疑ひを惹端なれバなかなか身よ

従ひ給ひ廣光と継忠と両老党ぶ事を定れを願ひ給ひこの壮夜ホを足下ホ附屬せ給ふ欲せさせる要ホ立ちとも駑馬ホハ優ちとあるん四郎太郎五この意を始ふ。考ふるに請おきなといれく齊一額をつ兒御諚兼りゆ以某ホハ敗軍の残兵でいひ世曩ホハ多田殿ホ従ひ城を接ひ賊を屠る朝夷大人の庇ホ立ちくい父兄の讐の首を獲ちりかれこの両君ハその恩義主君ホ等し。何ホ仕ふるとも合體同志の殿でちれば進退の時宜ホ従ひ君が隨意ちべ此りの秋某ホ今よりして朝夷大人ホ仕へまつりて犬馬の勞を盡しこ君の為身の為ホ報恩のあらあり幸ひ中ちの人ホ義邦領ちく彼者共も右の如しの心で許容と祈るのことこのあバ義秀微咲く城戸ハ頗智君あり水軍ハ亦勇士ち莊園一ケ所始めちの某ホ使れてい久後ちのりげ賀と為ちく考ホ在ち此校外ホ在ち有用の折ホ借ホ申。借れるもべ此中賀れ共意ホ任せく預ちべ。

とひホ歎ぶ主従の商量早ホ整ひ以當下義秀ハ父中直ホ対ハて集人ちこの守戸を知るや渠ハ大浦の住ち郷士某甲が女兒を娶夫浦平が妻のあるあ妹ちあく孤とあり。とあホ仕へく二十餘年奥平ホ及ぶあく。

處女と人ハ中直和殿ハ内儀の七てより年来を歴ちへ此の守戸我媒妁ぜん後妻ちて共倍ホ且見姫の護せ給ふ以西金の謀恩義ち一入まさよ。

あんといふ光仲義邦ちこの議寔ホ志ち多べ。現相応ー此夫婦ホとハ中直ち驚此ちハ見ひ給ふ某共半百ホ近し況く主従奔走ちて安ち以折ちぶ老婆三昧何ホせんこの議でちるハ先ち免ち推辞ハ守戸ち顔ち報ぬく。

夫ハ深ち考く議ち難人より生涯奉公ちべ。

よんと呼此ちく立んとせ光仲急ホ呼禁めく局よさのこ多ハ多ハ朝夷ぬのこれ彼ホ妹妁せんとハ中ちる事の情を精ちる身後まで忠あく扶持

なかの大功を賞せらるゝ由もあけれべその叔母ゝ今この報ひあるべん守直ハ故三位
頼政卿の勇士なりし并隼太の後なれば良人と頼むゝ不足ハあるべきとそ婚
姻をゝ今せまほしゝ且見ゞ太田へ帰さる後ハ吉日を撰むべし其人も亦
よくこの意をゝよ推辞ハそうあるべしと諭せば二人ハ向とだゝりゝ又いかゝもし
ゝ義光を恨ゝ義邦ハ義光をゝ久しくこれハ近日ハ石戸ゝ遇ん彼ハ越路ゝ赴ゝ
判五一三 勅禱の尼ゝ営中の沙汰を報く浅長井と小三を招く彼地より石戸へ来ると
いゝ義光頭を傾け御諚でハ必ども食邑ゝ就ゝ標吉郎ゝ
某従ハ不便ゝ思ハん義邦推久しく否そのゝを障ゝ
継忠のゝ物足らぬ朝長ゝ武詮と昌之を借ゝ易りその餘の雑人奴隷
ゝ荘柄生ゝ借用せゝ彼稲向ハ恩入ゝ旦勅絵の尼ゝ彼処ゝ
ゝ人倍ゝ告遣べ事あると紀ゝ戴紀ゝ佛足を見ゝ今事ゝ
しも焼ぜとゝ世話ゝ似く誰ゝ浮薄とせざるべ紀ゝ退紀く準備せばと
辭せゝく諭せ折ゝ隔嶺越ゝも咳紀く忽地進ゝ入るゝ義邦光仲ゝ対ひて義秀東道を仕れば数刻の劇席罪多ゝ
義盛ゝ甲夜の程見参ゝ入るべゝ老人の懶紀ゝ不敬を免べゝ
管待ゝねどゝ居ハゝ暁ゝ相譚ハんとゝ家臣皆進み
向ゝ大ゝ饗餐の歓びをゝ述ゝる言果て常盛ハ義秀ゝ対ひて
三郎家尊の仰ゝその武功あるゝ鎌倉殿の御家臣ゝ召加えゝ
いどもゝ父兄ゝ寓居ゝ荘園一所ゝ賜ゝ
馬を飼ゝく君のゝん大事ゝ備べ紀抑相模国三浦郡矢部の荘ハ故右幕府の
ゝん時ゝ義盛ゝ馬の飼料ゝ宜ゝ御加恩の別荘ゝ
君ゝ請ゝ障ゝ
ゝ

主人客ヲ謝シテ退クヲ俗ニ中座トイフ是レ都賊ヨリ鄱陽暴謔中酒而作ノ中ノ意ヲ取ルベシ

宣ひ給へといふ義秀謹て言葉もなければ義邦主殺光仲ホも共侶ホその歓びと述るあん義秀ハ只苦笑して諸君子の祝ひ給ふ君ホ住へく君ホ泊ざし給へと親ホ泊りかとも賞罰正しく人を用ゐる世とぞ姑く中座を免し給へ父の歓ホ赴給へ。この歓びを惜ミ給ふ守戸ガ暇も乞ふて来ん下河邊ガ後者ハ獣六郎ヨそろ泊さしく泊より奴隷をまわし給べし浦太郎も退給へ宜草鞋の准備をせ給へ守戸ハ後ホ跟給へ来よ。といひ捨て遠ゝ身を起せ寺ガハ後方ホ後ゆく後堂へとく退く程ホ浦太郎ハ下河邊高吉と共ホ人々ホ別を告て立まくもれば廣光も獣六郎ホあんとく三人齊一身起て。嫁頼ありぞ退給へ。ケ。これより後常盛ハ義秀ホ立代りて姑く衆客を管待を程ホ二郎義氏四郎義直五郎義重六郎義信七郎秀盛八郎義國ホの肥兄弟もかるくホ兄常盛と共ホ爵を勧ム

垣山四鳥の別離ホ似る義邦も光仲もかゝる団坐ハ異日復獲りくかんと胃ホの。ひもひも清談夜話ホ影も短き水成月の晦ホ近き玉兎盈れバ虧る聚雲のやくもかへるも別路の天ホも名残惜まく檐端の松ホ風暢ホ袂涼し給へ後夜の鐘ハ枕七ツ狐ホ交りんとく武士の時を沒るる哀れ。

後輯第五十八

天姉女の柱乞　勇敢人の貨獵

却説夏田藏人光仲入道扶中齋ハ次の日義秀ホホ辞し別れ給へ。間中隼人を遣く武藏の太田へ赴くゆゑ義秀則両三名の雑色奴隷を従へ彼主従の資ホ。

この日ホ下河邊ホ三郎高吉ハ守戸浦太郎共侶ホ義秀より隷られる。

従者ホ遣く首途し。伊豆を投てぞ給へる。程ホ佐味高利ハ光仲ホを目送り果て別れく宿所へ還りしく江三三廣光ハ越の岩神へ赴くとく准備

とりく取りけるを義秀急ぎ打ち禁めく且義邦を諫ていはく岩神へよりを報ろい
今こゝ火急の要支あるべ只速ぶせまほ沈い和君が石戸の入部こゝの地の繁華を
愛惜しで又徒ぶ日をおくるべ再不測の禍あんかれもかれもかれべ三二
標吉ぶをおくもやく彼地へ退却ゆへれも亦武詮昌之ぶを遣して送らせんと
ゆへとも嚮ぶ和君の遠慮の如く隨後の家臣多却寔ぶ嫌忌の端あるを
よりく腰越獄六をゆて彼地まで和君を送らせ更ぶ亦石戸より越中へ遣さん
三二も亦渠ぶそとく此度入部の倶をとく石戸より又越路ぶ遣はされ一事
両用ゝ枉さこの議ぶ従ひゆへとのぶ義邦沈吟じくいろ〳〵趣その理あり教の
まゝくせんやとゆもかくぶも計せゆへと苔る辭も詰らぬ折〳〵平太が荏柄の
宿所より義邦の迎ととく従者駿馬あるよ一童扈従の告るぶなん義邦ハ
遽しく義秀ぶ別を告くそぶ俱ハ出くやく程ぶ廣光と嗣忠い主の左右よ

従ひつ又武詮と昌之ハ残る暑の聳門前ぶそで送りるけ程ぶ義邦ハ荏柄の
宿所ぶ立ゝりく先亂長ぶ對面つ筐姫ぶ云云と営中ぶその首尾を壹豆岩神
夫婦のゝ又藁二郎校杖ゝの守戸浦太郎がゝさへぶ送るく長ゝ示され
筐姫ハけらくとゝくぶ悲しく幸ゆゝれ人の歎ゆを知る涙の雨の漏る袖を
顔ぶ翳して位ゆよあるとのよい亂長も彼父を退ゝ後ゆとくゝゆゝ
ゝれが愀然として嗟嘆ぶ堪ぎ直くゝ世を憤る恨ゝ色ぶ顕れる且くゝ
義邦ハ貌を斂めく恭しく亂長ぶうも對ひくこの月ゝ浅〳〵ぶ〳〵ぶ〳〵ぶ待の
歓びを具ぶ述くそのゆう某今ハ當地ぶ要ゆ武藏へ赴くべをの
故ハ如此てゝと義秀の意見の趣みづ〳〵ゆゝ様〳〵と具くぶを亂長
頻りぶ領ゝくこの議寔ぶ理り某宜くこのぜんとそ送ぶ示し合つ、その日を
光仲夫婦のゝと又彼校杖藁二郎ぶ身後の忠義を嘆賞つ終日くゝひ

かくしけり。かくてその詰旦胤長ハ義邦を問注所へ招く事ありて義邦石戸へ入部のよしを執権評定衆に告しかバ廣元善信らも速くその義ハ既に件の人に身の暇をゆるし折彼地へも下知せられり彼処なる安達が一族石戸左衛門の住捨る古舘のあるなれバそをそが侭になすのみ發足の寛急ハその身の勝手なるべしとて御教書を遞与されけり。これにより義邦ハ日ならず領所に就んとて行装をいそがれ程に縫速に整ひぬ。されバ又胤長ハ義秀に疎からぬ武士なれバ為に費を厭ふことなく廣光嗣忠らが外に自分の雑色奴隷をもて騶従を辛しける既にそのけふとトせし首途の日になりしかバ義秀ハその暁がたに城戸四郎武詮水草太郎五昌之腰越獣六郎にをねく走り来て豫て約束のことなれバ。獣六郎ハ吉見夫婦を石戸の荘まで送りて後にかの地より越中なる岩神へ赴けとて鞆繪の尼と判五ホに贈る書状を遞与て今既中して義邦夫婦ハ胤長

義秀に辞し別れてやや立出んとする程に佐味並内高利も後れ走て走りまく共に餘波を惜みけり。かかる中に武詮と昌之ハ斉一進みて切て相模と武蔵なる州堺迄もとまく頻りに供を望みしかども義邦かたく禁めて許さねば左に就右に就くぞ哀歓定やらぬ世をぬる郷なき武蔵野に飾る錦ハあらで織らぬ初秋なるら衆人の袖ハ露けし朝出立筐姫ハ輿子に乗るもよろびしとやがて苦しき別路にある假染の宿なれバ八声の鶏も鐘の音も今朝ハうらめし身ハ罪なくて配流人の心地せよとより果て立まるを諫め奨せ壮士の泣ぬハ哭くに弥まさりし。水雲萬里留別の思ひ餘りて辞なく立出で主友となる友の駒の足騒に任しても心ハ送る胸の月真如の影を仰ぐぞ悔しかるべし是ぞ此の朋友主従聚散離合逝て返らぬ別れに後にぞ思ひ合けられバ又義秀ハ光仲義邦に別れより欝々として楽しからねど扠あるべきにあらざれバ堅りて営中へ出仕して遠侍に

ひとを頼家卿ハ遊興ニ紛れく知ぐ去ぬ甘ニ絆ゆ多くニ怪ニ一人義秀呼
とそ召さるく程ニ去ぬ前ニ来ありーべ泊り近く侍らせく物ぐ去せく出ニ
語次ニ宣ふ灰ニ紛ね義秀ハ東西南北到らぬ限なく諸國を遊歴せーまぐ
逆旅の苦楽ハ姑く措く深山大澤人ぬ絶境或ハ遐鄙村落ニハ鬼魅罔両のあり
らぬ怪物ニ種見さそを退治せーすハ絶やこれ怪談ぞ手まく欲をとく一ニ
備へとと亦他変も多く問ぬバ近習の輩うも合笑く仰寝ニ理りく毒蛇猛獸
夜又天狗通力不測の変化ともを怕るく人ゆあれを鷄を捕ーるり
本事ゆありて想像れば遊歴中の怪談いくぐくもあんぞくくやあげくよを
右ぬぐりのそのうぜども義秀これをバんうくぐ且ーてむうぜうう御詫てハ
ども妖怪変化いそのうるあるく心より我ぜのこ多くハ狐狸の所為ーて必ーしげる
ぬ欲集諸國を巡りー折妖怪ぬどぬハいびも憧見ーてぬどかれば忠皂夜

ニ義の類怪むべく怕るべく画る如ぬ妖怪ハ世ニあぬめまくぬんといらせも果ぶ
せーニ亂長ゆくて数十里（坂東道六町一十里）ゆくく大蛇を斬く帰る来つ又仁田四郎
忠常をゆて富士の人坑を捜せーニ忠常従者と共ニ六人ゆく炬を秉て洞ニ
入り進くゆくて迫ゆくそのいくぬく里ありを覚ぶ時ニ蝙蝠群飛て面を撲
て頻りあり既ゆて前面ニ河あり高く漲りく渡るべくもあくぐりーを
従者ニが瀬踏る程ニ四人ハ溺れて死ぬり浩処ニ前途のかくニ閃め紀陽侍
火光と共ニ残る一箇の従者も忽地仆れて息絶くり忠常こをニ躊躇て
前面を仁と見させば蟬娟る一箇の神女彼首の水際ニ立在くり雪あり素紀

朝倉六編巻之五
頼家
月夜よ
嫦娥と
のみ
より家

て
ほを抗く勇士速に帰去れ臭骸凡夫の汝曹足踏入を所にあらず遅々せば汝
命を損ずんとく還らぎるべしと箴るその辞いまぐ訖らぎ逆浪倏忽張立て是首の
岸に寄んとせば勢ひ当るべくもなれば忠常は身に帯る短刀をもて取あげく
河へ水入と投入れて。躯を踊らーさく辛ーて舊の路を辿るも恙なく洞より
出ぬ。既にして往還の時刻一晝夜を歴ぬとやりあれらは神灵怪異の
事。忠常をもて證とせーもれども彼偽聞を免れ孤が虚言といぐ。ぬまんこれ
あり正ーに證ありの。日甲夜の程なり紀れ連日の酒宴に疲倦し宿酒を醒
さんとく。ぬとり高楼に登りて欄干に身を倚うけく吹入る風を待程に天中を
一朶の雲もなく月明に星稀なく狂鴉の杪を逐る声のみ遥にぬとり比は六月
中澣なる晝の皦照の天にも送りく天河原も個にけん中伏はえに過られども
秋氣暢ぐ松に声あーー時に西南のうくに當てく殿鍵なる五色の雲天引降をと

見る程に天文忽地影向して地を離ること三丈許られに向ひて間近く立て
綾羅の袂は四下に耀き紀蘭奢の薫はえもえぬ匂ひ天麗さる容は六
亦人間まありとーもあらぬほどぬ花をもてく譬とせんに花も及ぬ程なり月を
ゆく比んに月もなほ劣るに似たり左右に両箇の女の童ぐ。玉兎蟾蜍の
翳を執りくるもまた亦人の亂ねば玉面花容とりべ紀のみ登時天女貴の
初音にも優に声立てく云ふ。これは昔て云く将軍驚紀怪こあれに立て
月宮殿の端城なり此度天帝教誡あり紫微月宮の両殿を造更ぬ
中に天びて黄金の柱一本足らぬ。その顕家に徴やよと妾を降しあり。
かくのごとくなるを紀思ひ疑をなしありやせん将軍は原天の
列宿武曲星の再誕に犯せる科のあるまりに遂に人間に追降されく胎を母胎に
稟ーり右幕府の家子と生れて既に二代の将軍なり今天下無為にして富を

四海を保つ人のやまも憂苦煩悩の中とあり紀天堂に豊復らんや今ここら世の六道に
あの勅命を幸れ件の柱をさく進せくかの遊を慣ひみぐあの世界とて百
年の遐寿を有ちく楽を竭せ脱履の後天上の列宿と復かりんと群仙の
みな羨む所只この功徳に依こべ紀のことにいれく驚くこぶ前身卑賤さてそと
ゆへどの輙に所行のあるべきれが沈吟ずる頭を擡くゆひろひみく王帝の衣をせひ
ぬる黄金の柱の悔短いをぎをなるめを欲しめぞ教えゆと問を天女ぬ宮
長さ八二丈五尺なるべく周さもこれを称ぶべしと示ばいかく心の富慈黄金を
図の至宝ここら威勢をゆえにも沽る柱のいつゆと輙く造り出さ紀財用足ら
せん術ゆと推辞ば天女ハ然を合く心達し頼家卿日本捜追捕使とと四海の
富ハその身に聚入りまも宝庫ハ物足らぬも民ハ仰せて借りゆく件の柱を
幾本ことも日かゆび造り出さんの飛騨の深山ハ杣木樵る樵擔ハ易かるべし

惑ひをとりて難渋せんべきハ天帝へ違教の罪冥罰顕回りのこりて未来ハ
劫六畜とその身をかきんくこきよみぐこ深念をめり。と諭せハ渋て固辞申ゆ
逆天の罰恐れても惶るハ餘りあり。と何の日ぞれの方へ出べきと問へば天女ハ領ぬく約せると今ここて七日の間柱を
作りく彼迎の松ハ荷せゆへ奏ハけぬり七日に当るその夜三更の比めくび来く受
ゆ升りて天帝へ身の功徳を奏べし然とて漫ハ天意を漏こ男ーてかく
崇あんん努秘めゆと期を推して天女ハ雲の立紛れて彼女の童共伯ハ公見ぬ
ありかり當下れハ忽然と其方の空を目送るのこ夢とあへハ夢ハあ現と
ゆハ絶く迷ゆ扶已べぬおくれハ猛ハ事ハ假ぬく黄金を泉ハ社を造ハ
百ゆ一てその工卒をりをくくゆ約束の霄ハありしべ作り磨ぬし黄金の柱を
彼高楼の下なる庭の松ハ荷りけさせく近習のぬを遠離つれ只ぬり庭ハ

出さく香を焼き心を澄し霊ゆく天を俟程に果して天女影向して彼柱に立つ。歡びの声音も妙に賞賛しつゝ将軍今この功徳により舞天帝に奏し万歳寿福ハ多人の隨喜べく海内ひゝく泰平かゝん恩慮を政支に費さとかく恨り多き楽しさを極めゝへと慰めくるをめて招けば奇なる犯件の柱きたのかゝら松の梢を離るゝ花に閃めき登るとゝろ程に左右に従ふ女の童に本末やさしく受とめくるぶ侍肩ふるものをれば累り包む白雲に靄ハつゝを西南のくゝふ靡き聚く失せけるこの夕被露せざれども予が目撃せし所中さく誰とそ知らぬものか抑神霊奇異のものかゝり正記證あんやさぞ汝ハ江湖上に神異もかく妖怪もおびたゞしく欺いふぞやと辭せずしく詰りゆへべ義秀が宗れ果て思ぎ天記息を吹き竹取字律保の物の本捜神異苑の小説に豫てもそたることゝ今の世にて為る実験ハ沿くゝ記新奇とまうたべ。そもいつ比のあり様にく

傍ちの人々れハ近習の輩優へく遠くもあべそのゝ果く又只半日に及ぶこと不審よりぞ。義秀領ぬく貌を飲み恭しく御座に對ひて頼ゝ記基固酒寡聞に満ち世ハ真の妖怪あゝとまう者を謝さ世ハ天女の一奇変耳新し記を疑ひ給ふに有ねども心ぶやゝ有ゝ世ハ不忠かべ。彼唐山なる道家の書に紫微玉城の説ある人を魅ハを寓言あり天ハ虚中て空なる氏陽徳ハ一く形状ハ一壁言ハ神の像ハ為る祭ハ在ると不ぶ如ゝ天上ハ亦人間に異なる仙宮殿楼閣あべ記や詰く宮殿ありとの世ハ辰楼海市の類ハて真の宮殿なるぶ朽頃記ゝと修復世ハ世ハ工作を真ゝんとゝいふべ。以ゝ仙天文の有無ハて知べ記ゝかくのゝまゝ我意ハ慕りく至尊を犯せ不敬の罪を醸ぶるゝ仍ていとも惶ゝ辛ゝ一回ゝ身の暇を求べ天女の往来を渉猟究やく真偽を其心ゝ為べ是某が願ハて世ハ果び頼家卿

忽地蟹と赤ちゃくやされ義秀汝られを侮りて狐貉ふ魅うられ仆虚けんめと
思ひもらさるるめ。すや汝が才長へ。河源を究やく織女ふ造けん彼張
騫ふ倣やとも今更天文の往方を索ねく真偽を知らんを願ふと所狂人ふ異
なる。定ふ汝の限りこれもその身の願ひを詐さびいとが惑へる狂惑ざり
しかぬ。ふ見ぐ。天文の有無を諦して懲を由ひ。よりて翌より十日を限りて
汝ふ身の暇を取らせん知あらば天ふ升りて正地徴を取て来よ。ふ空しくして立
ちくらぶその度ハ決して免さじと。とく退りて升天の准備をせよと敦国ふ命じ氣色
平ならぬふ近臣ちのく面ふ汗握りて。ふ様ふ求めて自滅を招ふ
庶し無益の論議ふ物を推を博士ちのうちそさまとあらぬのうちりんそ
かくそれども義秀ハ此ふ驕ふ言受して宮中を退出つ。躯て宿所ふ還りて
どふ又やよりあれば父ふ兄ふも定ふ吉び某けふ宮中へ伺候しとゆひふ。

伊豆山の裾野ふ出ぐ。追鳥狩をせとある山口命を稟ふ。紀よく走りて賀力ふ
駿兵十名ばかり借しふ。野猪麋鹿ふ多ん時列卒の准備ふ。いつふ義盛
あろ紀。十人ばかりふ五六人倍ふ。しとそ家録召ふ立地ふ鮮云云と分れば
義秀ハ退紀く城戸四郎武詮と水草太郎五昌之をほとり近く召びよせけふ
営中ふくあり。趨天女影向の一條を具紀ふ。しく文いあらんそふこを必疑
術ある山伏ふ盗賊の所行ふ人ふ疑ひ。ふ。ふて如此々々と請おらしつ。
これが郊外の山野を渉獵ふく彼舞者の在処を索ハ臆度の外を出ぐして。ふ
嘩ふく生拘ふ。しかくその方位を攻ふ天女の進退一度ふ。ふ西南のうちを投て
裳去りたりとふ。あれ。ふ足拭ふ貌姑拳ふ。ふ。ふ天城の山中ふ。ふ。ふ先
天城のうちをたづねて遣ぎハ足拭を渉獵ふべし。汝達よくこのあろそ。ふく物ふ
遣ハ死力を盡せよ。ふれども癖者ふ入ふ。ふ。ふ秘よ外ふ。ふ。ふ洩らしそと示

せば武詮昌之いあらば果てぞ退けるかくてその日は果敢かく暮てぬ曉うてふ
ありしらべ義秀は獵裝束して頭に一葉の綾蘭笠を戴き肩に二十四挿こる獵
箭を背高に負ひて腰に俱利迦羅の短刀と平弓を左右に横佩き鐵撮
撰を突立てくつきと馬に乘らざりけり左右に従ふ兩箇の郎黨武詮と昌之と
腕甲脚帽に身を固めて各器械を引提げうこの他士卒の騎兵五人の奴隷
主従總て廿四人その夜は貌姑峰の山中なる長ぶ宿所に曉を待つこの地方は
後ゆへく遠近ちこより渉獵んとて又曉うに立出でく只管路をいそぐ程に第
三日の午時に天城の山ふもとへ入ると十五六里（東道六町一里）に及びて抑伊豆州郡
賀郡天城山と云へば麓より麓まで行程大約三十六里（東道三十六町一里）
人烟絶えてあるとかく羊腸なる山路山滑に路細く一夫関を戍ちて千軍
萬馬も進ぶこと難し蜀の棧道も似るべし青葱なる常盤木は弥ぐるに
枝をまじへて凝形の日影も漏さじ蔓延る藤蔦羅は岩より岩に這縁て
造化の網を張れるが如し向上れば千丈の青壁刀を削るかと怪まれ直下れば
百尋の碧潭鑒を穿てるかと驚うに樹上に聚る山蛭は旅客の足音を聞て
落蒐を撥拂へども飽ぐれば去れぬ叢蔭に臥す牡鹿は炭焼く煙に驚き起て
人逐されども走らざれば己が鳥は樹隱れて高音に頭れ雲は峯に帶しく
風のふに解る山靜かにて太古に似たり日長しく少年に異なれば誰か浮世に水に
盃を濯ぐ流るを知らぬ疇う遊仙の嵐を訪ふ還ることを忘れう
奇巖怪石攀れども陟るべきに鳥路熊徑進めども到り易きに寔に
是塵外の住境に遊ぶ今半日の逸栖は彼亡秦の民にぞ漢とあり
晉と遷りしその世をもぬるはに似たり程に義秀は主従草を
折布て腰兵粮をうちのべて食果て立んとすると忽地南の方を隔く

鑿の音丁々と谺ふ響き渡り、ぐそーらぶ義秀耳を欹て武詮あれを聞く歟
昌之いかゝぞやと問れて齊一小頭を傾け現山樵が杣木伐る斧の音ならん
石工が石を鑽る鑿の音ならんとの人が義秀頭を掉ふて否木ふ
あらず石ふあらず彼ハ正しく鑿の音と衆皆鑽けと遠足進めく件の音を
あろ當ふあほ山深くとも人ゐを既やく十町あり或ハ葛ふ攜ふく登り
或ハ岩を傳ふくぞり辛して近つ紀ふく樹拉の間より闌ふ果して前面の嶮の
ほとりふさゝゆる穂屋を作りく癖者もべく五六人四下も糴く黄金の柱を
鑿めて剪碎くを鞴ふうけく燒爛ものとゝゆる半ばぞ過ぐるそが中ふ只一人
頭くもたる癖者ありそハ義秀が岩神ふく擊漏しゝる賊の殘黨鐵眉
矢藤五重連ゝ原来彼奴が幻術もて天女とゝ化せく上を欺紀騙器りたる
黄金の柱を燒ゝるもく售んとをゝりゝ豫てゝ聞ゝしとをゝ

合ふ紀ふく後方ふ立ゝる武詮と昌之を招紀ふく舞如班ゝと見けバ二人を
齊一ゝ見ゝ又駭立ふふ見紀ふ武詮ハそが中ふ十人を後へく路あれ徑を
辿ゝくも穂屋の背ふ遠り出るを彼首ふ者ふゆゝ當下義秀ふつ紀
立ふゝる鐵撮棒を昌之ふ遞ふ與ふそ誅し合せゝるゝれバ昌之ふく選みゝ
そが根取て突立ゝふ渠も多力の壯校ゝ脫ふ稱ふべくもゝ只曳揺りて
駭兵ふが先ふ立ゝく樹間ゝ頭れゝる程もゝ武詮も亦穂屋の蔭ゝ
駭兵を進め走出く雙方齊一喊と揚ゝる声ふ駭く山賊ふハ吐嗟とぞゝ
ゝゝれがゝ近つ紀ふ太郎五昌之笠ふゝくして間を詰紀鐵撮棒を見紀
ゝて四下ふ響く声高ゝふゝれ殘賊鐵眉重連景義ふ岩神ふく
命を貸ゝることの義秀を忘れハせず天羅の中ふゝりゝ汝が首ハ汝が恐ふ
ぞとゝく邪術をゝて上を瞞しゝり幾十貫の黄金の柱を騙器りゝた

駆れく鞭ふりけく焼るも竊ふ售んと伎価るよりハ天眼通もてこれあり、知れりありて追捕の仰を稟さかう多勢をもて捕竜されば左慈張角が術ありとも一歩も遁て路ハ無し。とくるを来るとく郷の索を受まと呼れ武詮も亦戸ゆり立て陸奥の戦ひ不さ所ものありとも荒る城戸四郎武詮この隙ふ在り其処ゆ退紀をと罵りく蒐地ふ嘯く蒐れば忽ち下の山賊脱れちさくやゆひん巨刀ゆふく手挽紀くゆはせ立ゑと斫拂ふをめくゆと武詮昌之勢五を進めて些も擬議せず或い組伏せ衝倒し一箇も捕らさを鞣をと索をうそで牽立るその間ふ昌之い武詮と共倡ふ重連同ゆて左右ゆり撃漏さじと進ゆりさる程ふ重連い要時ゆ下の山賊を頼りふ罵り励して防紀戦んとせし甲斐もなく皆彼此ゆく生捕られ残るそその身一箇ふゆり如況く水草昌之を朝夷之とうくけるふ。ゆ武詮と左右より間近くゆるを尻目ふけく口ふ秘文を唱る程ふ走りかゆる昌之武詮矢声を合て丁と撃ち寇ハ崩れく重連い足下ゆ立升る雲ふ閃りとうゆ来りて。脱れ去らんとゆる処を半反ゆうゆ彩る樹蔭ふ張ふ義秀が透さず弾と発つ箭ふ重連ハ乳の下より背へ箆深ふ射串れく忽地撞と倒落る武詮昌之をり累りく緊しく索ゆけて登時義秀ハ程よ紀石ふ尻をうゆけ。先重連を牽居さもてみづからこれを責河ふ既ふ各所の深ふ弱りてめいふべくもあらざれば又彼ゆ下の山賊ふ五名を推並べく鞭懲させく責問へば苦痛ふ堪ず堪ず首伏ゆ某ふハこの山中ふ年来住ふめども有介ふ鐵肩重連ハ曩ふ越の岩神ゆう遠く脱れて只ひとりこの山を踰んとせし折其ふ相識ざれば剥奪んとて戦ひふ勝め絶くゆうけをかりしハ重連ハその身の出処と術ありしを云云と説示くゆうゆふ某ふハ渠を頭と推仰れく徳屋を

矢藤五
城戸四郎

天城山千
義秀鉄盾
矢藤五を
生拘る

譲りて出ぬ。翌の日重連又いつもの今宵腰ゐ物もおく各位も亦銭あたかて月日を送るとも。あるべきなれば。これ幸ひ奇術あり今宵鎌倉ゐ赴く筒様々ゐ行ひ。夥の黄金を獲つべしと酒煖めてかへりを等ねといの欲とゑば稽消もどく。體のんえびあり〳〵ば某ホいその幻術ゐ心服して疑ひぞいと憑しくゐの程ホその夜ハ空しく火り来つ。絳をゆ成りて歓び告て七日ばりを過〳〵ぬくび雲ホうも来て鎌倉へと蜚去り〳〵ば果してその暁々ふいと大れる黄金の柱を空中より滾隊キてその身も雲を下立ゆつ絳云々鎌倉殿を騙課せ〳〵為体その宵の首尾を報るゐぞ某ホハ呆るとあでゐみゐ欲びてうちも惜ゐ。〳〵ぬく柱を售んと請ホ重連頭をうも掉りて早てその伏售と。ゑば絳立地ホ裳覚れくその祟速ゆべし打砕れ焼爛して以許て漸々ホ售〳〵ば買ホゆこれを疑ハぞ長くその利をゆつべきと諭ホ衆皆有理と応ぬ。鞠鑿を求るホ麓村ゆもあるとゆければ北條ゆ赴ぬ。

これを得ぬこれらの所為ゐ日を費して焼初めりぬく日もあく経ぬその訣だホゆもまぬ售ぬで捕られぬと卿言がゆしく陳じんり義秀ゆて武詮ホ徳屋を展換さるゐ旅芳笈ゆんとゆ取て初めき見ホこハ紛ぬべくもあるぬ陸奥ゆく重連が逐電せ〳〵時鞠取跡。経任が妖書ゑ第一巻ハ飛行の術第二巻ハ泳禄を発し十曳の石ゆも徒ゆの術第三巻ハ風を喚び雲霧を起ぬ術を載ぬう皆隠語ゆて速ゆ読易ぬ。ゆの〳〵れば義秀ハゆ〳〵ゆ。ゆも残黨穿鑿のるゆりゆゆ〳〵ゆ欠ぬそ。ゆく巻くぬ。ゆ〳〵ゆ懐人交ゆりぬその智ぬその勇みゐの圖ゐ當りし義秀がけゆの道正神出鬼没の良策ゆれば武詮昌之ゆく感じて左右ゆとく進ぬ。ゆ某ホ不才ゆて〳〵ゆ〳〵ゆ義ありぬゆ越の君神ゆも重連ハ幻術ゆて君ゐ惑れぬその葬れ

當りたと突かゝりけれバ故間も遠く渠ハ雲から乗て紫立んとするを君が二箭を射て落されたバ所以ふおんぎんと向へバ義秀微笑て虚実に心つきぬれバその跳ひ理りあり術者の術ハ邪正のもんでを受るもの虚實と変ハその術の応験で是に盾を繊ね箭も幕に障れバ落るが如し岩神が今かう気盛て重連を撃んとせしバ還て彼奴を走らしより是同くこの理をもって昌之に名を告せて且認られたる棒をもつて逃るれバ躱れて追すがれバ重連ハ只昌之を義秀と思ひ故に討んとなす昌之ハ棒も刃も彼身に當らだ脱れ去んとする所に及びて渠ハ外に敵あるをしらだ其の虚に乗じて發ちる義秀が箭ハ不意に出く岩神の棒と同じくなりてその術も慈して躬く落されたるものぞと示せば武蔵昌之ハ敵を擒れる妙要ふちく感服なりぬ一竟義秀重連ホを生捕て又甚麽なる詰説あるハ亦復編を續て解分るを知らん。

朝夷巡嶋記全傳第六編巻之五 終

附ていふ この書第七編の巻々を繰に至らバ先天城山の條の述れるをもて始とす。然して後に義秀ふたゝび陸奥へ赴き頼家修善寺の浴室中に弑せらるゝを聞くに及ぶゆり又ハ朝夷切通の権輿三浦の矢部の不動和田合戦の濫觴義盛軍議の時に方て人の視聴を避んために大磯なる長が妓院に親戚朋黨みな同意の武士を聚會て和田酒宴と唱ふる事中し扨建保の和田合戦終に敗軍に及べば義秀その徒二百餘人と共に船を大洋に泛めて危窮を脱て変に終ろべしその間義邦夫婦父子主従一期の事且見姫主従并に田鶴媛鞆繪の尼判五十三浦太郎ホが事盡んとしくハ又起る嶋めぐりの條に至て第七編の後にあらん八百日もく濱の真砂拾又ハの壷の碑をとるを知るべしよと書肆ハ急げど早ク書も盡しかて看官後をまちはやせずとも早く述べしと此長物語をしらせん異日の遺忘に備へんとてその提要を記そのみ。

[illegible]坊賈の利を攫もとる素よりなる所なれども猶甚しかれども拙著常世物語三國一夜物語の二書のごとき文化丙寅の燬ふ係りてその刻板一々烏有となり一八過半亡びたりけるを一賈豎曩ふ常世物語の足らざるを翻刻又一夜物語を翻刻せんとせるに[illegible]これらをもて校正を乞ひ[illegible]ふ[illegible]就中常世の一書只恐ふ書名を改め更て且出像も假名の書ぶりもかのごとふ[illegible]ばるとなれば誤字脱文假名違ひなど枚挙るふ遑なかるべき事なれば[illegible]これを知らぬ今茲相識の一書肆が常世の板を購得うとて校正を乞ふ及びく。せっかく知りてうち盤なかれば件の二書ハもとく舊板と違ふところを書くく。予が面目はあらばるれ少らぬ顧ま九年前の戯墨なるを今ちら懸念もぐくゆゑ[illegible]どこの名を責らるることをいちよ聊その[illegible]を書けくるふるのん。

丙戌長月朝夷巡嶋記第六編の後ま贅しく。作者ぬてび識 村田

家傳神女湯 一包代百銅
産前産後婦人のみち諸病を即功神の如し
精製奇應丸 大包代弐朱 中包代参朱 小包代壱朱
某種とえらみ製方とりまぜ[illegible]その功百倍ひとの物と異なるる如し
熊胆黒丸子 一包代五分
婦人病の妙薬 一包代五匁 半包代三匁
本家 浅草神田明神下同朋町東横丁 瀧澤氏製
弘所 元飯田町中坂下南側四方角九紀沢氏
取次所 大坂書林 河内屋太助

著作堂手稿 朝夷巡島記第六編 書画劇人目次

繡像	浅戸	一柳齋歌川豊廣画	巻一 巻五 田中正造
淨書	浅戸		巻二 三 四 谷金川
剞劂	京		巻一 二 三 四 井上治兵衛
	大坂		巻五 市田治郎兵衛

文政十丁亥年春正月吉日發販

江戸 馬喰町三町目 若林清兵衛
外神田平永町 山崎平八
加賀町 美濃屋甚三郎
心齋橋筋唐物町 河内屋太助

大坂